

第 91 回全国高等学校サッカー選手権大会における
速攻と遅攻に関する研究

The study of fast-break and slow-break in
the 91st All Japan High School Soccer Tournament

1K10C210-5 芝 脩希

主査 堀野 博幸 先生

副査 倉石 平 先生

【序論】

現代サッカーにおいて、相手チームの守備組織が形成された後に得点を奪うことは、守備意識の高まりもあり、困難となっている。よって、得点を奪うためには、速攻を用いた攻撃を成功させられるかどうかが重要となる。

しかしながら、近年では速攻を防ぐために、素早い切り替えからの守備がトレンドとなっている。速攻を防ぐ意識が強まった現在、試合の勝敗を分ける鍵は、速攻が防がれた場合においても、遅攻を用いて得点することができるかどうかであると考えられる。

そこで本研究においては、全国高等学校サッカー選手権大会における、速攻と遅攻を始めとする攻撃スタイルの傾向を明らかにすること、また速攻だけではなく、遅攻を用いて攻撃することのできるチームが大会で上位進出を果たすかどうか、検証することを目的とした。

【方法】

1. 分析対象

第 91 回全国高等学校サッカー選手権大会の全 47 試合のオープンプレーから生まれた全シュート（635 本）を対象とする。

2. 分析項目

速攻と遅攻、またそれに加え、速攻と遅攻に関連する 4 項目も併せて、計 5 項目を分析項目とした。

【結果】

1. ボール奪取地域

大会の傾向として、行 2、行 3（ピッチを縦方向に 6 分割）でのボール奪取回数が有意に多く、それ以降、ボール奪取地域が低くなるにつれ、シュートに至った回数は減少していった。Best4 群と Best8 以下群、プレミア群とプリンス以下群の間に有意差はみられなかった。

2. ボール奪取直後のプレー

大会の傾向として、Go の回数は Stay の回数と比較して、有意に多かった。Best4 群と Best8 以下群、プレミア群とプリンス以下群の間に有意差はみられなかった。

3. パス本数

大会の傾向として、パス本数 3~5 本以降、パス本数が増加するにつれ、シュートに至った回数は減少していった。Best4 群と Best8 以下群に有意差はみられなかった。またプレミア群はプリンス以下群と比較して、平均パス本数が有意に多く、パス本数 6~7 本、8~9 本の割合も有

意に高かった。プリンス以下群はプレミア群と比較して、パス本数 0~1 本の割合が有意に高かった。

4. 保持時間

大会の傾向として、保持時間 9~12 秒以降、保持時間が増加するにつれ、シュートに至った回数は減少していった。Best4 群と Best8 以下群に有意差はみられなかった。またプレミア群はプリンス以下群と比較して、平均保持時間が有意に長く、保持時間 21~秒の割合も有意に高かった。プリンス以下群はプレミア群と比較して、保持時間 1~4 秒の割合が有意に高かった。

5. 速攻と遅攻

大会の傾向として、速攻の回数は遅攻の回数と比較して有意に多く、Best4 群と Best8 以下群に有意差はみられなかった。またプレミア群はプリンス以下群と比較して遅攻の割合が有意に高かった。

【考察】

大会の傾向としては、速攻を用いた攻撃が多くみられた。その理由として、守備組織を素早く形成して守備を重視し、速攻を狙うといったトーナメント方式特有の「負けないサッカー」を戦術として採用するチームが多かったからだと推察される。

Best4 群と Best8 以下群の間に、全ての項目で有意差がみられなかった。その理由としては、攻撃スタイル以外の要素（PK 戦に勝つための戦術や運、セットプレーなど）がトーナメント方式で勝ち進むために、深く関わっているからだと推察される。

プレミア群はプリンス以下群と比較して、遅攻の割合が有意に高かった。その理由としては、遅攻を用いた場合においても、シュートまで持ち込むことのできるテクニクを有しているからだと推察される。

【結論】

全国高等学校サッカー選手権大会において、ボール奪取からシュートに至った攻撃は、速攻が中心となることが明らかとなった。また優れたチームは速攻だけではなく遅攻を用いた場合においても、シュートに持ち込むことのできるテクニクを有するということも明らかとなった。しかしながら、全国高等学校サッカー選手権大会においては、遅攻を用いて攻撃することのできるテクニクを有するチームが、必ずしも上位に進出するわけではないということも同時に明らかとなった。